

経営者への活きた言葉

どん底から復活する

1. リーマン・ショックから2年半、回復基調にあった日本経済は、未曾有の大災害で計り知れないダメージを受けた。だが、敗戦の焦土の中から世界史に類を見ない高度成長を遂げた日本人に、乗り越えられない壁はないはずだ。その突破口になるのは、かつて松下幸之助氏や本田宗一郎氏が見せた強力なオーナー魂である。明治維新も敗戦後も、そしてあの阪神・淡路大震災の時も、いつも世を再び照らしたのは、一人ひとりの経営者の活力だった。
2. 阪神・淡路大震災と東日本大震災の大きな違いは、16年前の震災を乗り越えたという歴然たる事実と、復興への揺るぎない自信を国民が共有していることだ。同じような経験をした人がいる。自分たちの気持ちを心底理解してくれる人がいる。どん底の状態から復活した人がいる。そのことは、東日本大震災の被災者にとって大きな励みになる。
3. 企業経営では、今後の復興に生かすには次の3点が重要だ。
 - ①慌てない……………業績が落ち込んでも慌ててはいけなく、これから起こる得ることを予測し、一つひとつ落ち着いて策を講じれば必ず希望の光が見える。
 - ②変化を見極める…今回は原発事故も重なった。アジアへの生産移転や在宅勤務のような働き方に拍車がかかるとも考えられる。
 - ③気を緩めない……阪神・淡路大震災では、半年後に被災地外の倒産が多発した。

(参考:「日経トップリーダー」2011年4月号)

経営者のための経済学

今回は要注意・日本国債の格下げ 伊藤隆敏(東京大学大学院教授)

1. 1月下旬、スタンダード&プアーズは、日本国債を「AAマイナス」に格下げした。これは中国と同じで、財政問題に揺れるスペインより低く、イタリアより高い。今回の格下げは、日本の特殊要因(日本国債は回の格下げは、日本の特殊要因(日本国債は95%を国内の投資家が保有している)を無視した不当に低い評価だ、という声がある。しかし、どうも今回は違うのではないか、という声もある。それには四つの理由がある。
2. 第一に、日本の国債のレベルが、GDPの2倍に近づいており、その規模が大きすぎることである。第二は、巨額の国債残高にもかかわらず、財政赤字が拡大していることだ。第三は、増税のメドが立たないことだ。第四は、中長期的に少子高齢化がますます進行し、財政再建が困難になることだ。

格付け会社の警告を「オオカミ少年」と揶揄やゆせず、財政再建に向き合うことが大切だ。

(参考:「週刊東洋経済」:2011年2月12日号)